

藪の中

作詞 金子 泰

〔芥川龍之介「藪の中」による〕

【第一幕・事件】

検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございません――

今朝、裏山に杉伐りしようと思ったところ

山陰の藪の中に男の死骸

縹の水干 さび烏帽子 胸もとには突き傷ひとつ

竹の落ち葉を蘇芳に染めて、あおむけに倒れていた

踏み荒らされた藪の中 太刀はなし 馬もない

そばにはただ 縄一すじと そうそう、櫛が一つありました。

盗人の白状

いかにも、去る年鳥辺寺に詣でた女を手ごめにし、殺したるはわが所業、

されどもこたびは 男はやったが女は殺さじ 行方もとんと知りませぬ

昨日の昼を過ぎたころ、あの夫婦者に出会うたり

小憎らしい風めがナ 垂れたる絹をさつと吹き上げ

ちらりと見せる女の顔が まるで菩薩に見えたとき

たとい男を殺してもきつと奪うと決心せり

「ま、待て。最後までお聞きあれ」

藪の中へと男を誘い、持ったる縄でふんじばり 杉の根がたに括りつけ

竹の落ち葉をほおばらせば 殺すまでもなきほどに

女の手をとり連れ来ると 一目見るなり小太刀を構え わしを刺さんとする気性

にらんだその目は強けれど 太刀さえなくば せん方もなく なんなく手ご

めにしおおせり

女は泣き伏す

そをあとに 藪の外へいぬるわしが腕に 突然遮二無二縋りつき

「あなたか夫か どちらか一人死んでくれる。生き残りたる男に添いたや」と

燃える瞳で訴えるは

昼なお暗き藪の中 燃え立つ光を見つけたり

されば殺さん 殺して女を妻とせん さりながら卑怯はすまじ 太刀うちじゃ
男の縄をほどきて立たす

なるほど奴も侍らしく 血相形相変えて憤然と 大太刀引き抜きとびかかっ
たと思うてほしい わしも荒くれ手練れの一合二合三合と太刀切り結び 八太
刀九太刀十太刀 ばちばちゴゴツと火花散る ちりてはまた組み打っては
しのぎ 数うることにじつに二十と三合、わが太刀、男の胸貫く 男はどうと倒
れゆく わしは血染めの太刀をさげ これ見よかすと女の方を振り返る

「と、女はどこにもおらぬじゃないか」

今度はわしが命とて 太刀弓矢奪い逃げたるも 絡め捕られしこの顛末^{てんまつ}
どうで構^{おうち}に懸ける首、逃げも隠れも致しませぬが
だがね、太刀で殺すわたくしめと あんたがたの 権威権力 金や言葉や空気
をもつて 血は流さずに殺すのと 罪の深さを見たならば どちらが悪いか
わかりませぬぞよ

【第二幕・真相は藪の中】

清水寺に来れる女の懺悔

「…その男は わたしを手ごめにしてしまおうと 縛られたる夫を眺め あざけ
る様子でおりました」

夫のもとに駆け寄らんとすれども男に蹴倒され はっと合つたる夫の目は
われをさげすむ氷のやいば 斬られて凍るこの身と心

昼なお暗き藪の中、木々の葉越しにわが目を射るる 空遠ければ

「もうご一緒にはおられませぬ。われは死ぬる覚悟なり。

されど 我が恥見たる御前をいかでか残すべき。どうかお死にくだされ」と
ただ一心に申したり

夫はその目を離しませぬ われは見つけし小太刀振り上げ

「お命頂戴つかまつる。われもすぐにお供しよう」と申したり

夫は たしかに 聞こえぬ声で 夫はたしかに「ころせ」と言うた

息の絶えたる夫の顔に 西日一すじ落ちいたり 夕波や 汐満ちくれば
とどまれとまれ片男波 あなたへざらり こなたへざらり ざらりざらり
ざらざらざつと

泣くをこらえて 死骸の縄を解き捨て 後を追うとて池に入れども 小太刀
で咽喉をつこうとも 死にきれませぬ
「死ねませぬ ああどうしようぞ」

巫女の口を借りたる死霊の物語

盗人は 手ごめにしたるわが妻を あれやこれやとなぐさめて

「この上は わが妻にならぬかやい いとしと思えば かくいたした」
わが妻は うつとりとして顔もたげ

「そんならいつぞ どこへなりとも 連れて行ってください」

そんな顔をするのかわが妻 ぎりぎりとなな妬ましや

夢に酔いしか手をとられ 藪の外に行こうとして

たちまちに顔色失い 杉の根もとに縛られし おれを指差し

「あの人を殺してください」 「あの人を」 「殺して」と盗人の胸に縋り付く

されども盗人 わが妻を二ツ蹴りに蹴倒して おれに心を尋ねくる

あの女はどういたすか 殺すか生かすか 殺すか

昼なお暗き藪の中 揺れる木漏れ日 掴むとするは

池水の月をいたすらに 望みて溺るる猿なり

妻は叫びて藪の奥へと逃げ走りけり

盗人はわが縛めの縄を切り、それぎり姿は見えずになんぬる

静かなる藪の中 すすり泣くのは わが声なるか

小太刀拾いて二突きに わが胸ひつ割く

さびしい日かげも薄暮れに 誰そ 忍んで来たる

誰そ 胸よりそつと刀を抜きしその手の主は

おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまった

されども われは語らねばならぬ

いつまでも語らねばならぬ